



Title	不従順な哲学 : トリエステ哲学学校の挑戦
Author(s)	Baldari, Flavia
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2026, 8, p. 118-134
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/103637">https://hdl.handle.net/11094/103637</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 特集2 第16回臨床哲学フォーラム

テーマ：イタリアの精神保健と哲学実践

## 不従順な哲学 トリエステ哲学学校の挑戦

Flavia Baldari

### 要旨

本稿は、2014年に創設された「トリエステ哲学学校」の思想的背景と実践を考察するものである。哲学者ピエル・アルド・ロヴァッティの思想を中心とし、トリエステ哲学学校のやり方、目標、挑戦を論じる。同校は哲学を「実践」として日常に取り戻すことを目指し、哲学の再生、制度批判、ケアとの関係性、政治的視座、さらには主体の探求について問いを立て直している。同校は年齢や専門にかかわらず誰にでも開かれ、都市で新たな社会性を経験することを可能とし、哲学的対話を通じて「集合的知性」の形成を志向する。バザーリアとフーコーの思想との連関は、学問や権力の言説を捉え直し、主体性やケアの問題を深める契機となっている。また、ロヴァッティの「弱い思考」「距離を生きる」(abitare la distanza)といった概念に基づき、哲学を真理の伝達ではなく批判的訓練として提示する点に特徴がある。哲学をケアの実践へと開くこの試みは、哲学の社会的役割を再定義する「不従順な哲学」として注目される。

### 1. はじめに

2014年に始まる「トリエステ哲学学校」の存在と実践をより深く理解したいと考え、2025年8月10日、トリエステにある哲学者ピエル・アルド・ロヴァッティの自宅を訪ねた。そして、彼と精神科医・精神分析家のマリオ・コルッチ、哲学プラクティショナーのアレッサンドロ・ディ・グラツィアと対話する機会を得た。彼ら3人は2014年から同校を運営しており、創設時の学校の目標、学校の方法、哲学的実践について尋ねた。インタビューというより、筆者を含む4人の対話は哲学対話ともなり、互いに発言の意味を深め、問いを立て直す場面もあった。決定的な答えを出すというよりも、互いの応答を尊重しつつ、学校について再考する機会ともなった。個人的にもっとも興味深かったのは、彼らの実践のやり方を垣間見ることができたことである。

その対話で浮かび上がったのは、トリエステ哲学学校を方向づけ、その中心的な目標をなす主要なテーマである。すなわち、今日「空念仏に終わり (lettera morta)」がちな哲学に再び生命力を吹き込む必要性、制度・言語・権力への批判、ケアとの関係性、明確な政治的視座をもつこと、そして、批判的な実践を主体的に担う「主体」に着目することであり、これらが、学校を生み出し形づくる思索の出発点になっている。哲学的実践というのは決定的な方法はなく、目的もいまだに曖昧である。本稿ではイタリアのトリエステ哲学学校で行われている哲学的実践の一つの「やり方」を紹介する。方法ではなく、「やり方」という用語を使うのには理由がある。4人の対話時に「方法」

について尋ねたところ、明確な答えはなかった。「方法」や「指導方法」という表現はある程度肯定的な指導を指すが、そのようなやり方はトリエステ哲学学校にはあてはまらないことがわかった。コルッチが言うように「方法より経験」があり、実践の経験が積み重なれば実践のやり方も変わり、それに応じて学校の実践も絶えず見直されている。このような実践の把握をふまえ、本稿では学校の創設者ロヴァッティの思想を中心として、トリエステ哲学学校の実践を詳しく検討していきたい。

とはいえ、最初にいくつかの点を明らかにしておく必要がある。まず、「哲学学校」という名称についてである。そもそも「哲学」とは何を意味するのだろうか。その哲学はどこで実践されるのか。どのように実践されるのか。「実践」とはそもそも何を指すのか。先に述べたように現在、哲学は実践されるものというより、学校や大学で「教えられる」ものであり、それは主として哲学史の形を取り、哲学者の文献を読み、その思想を学ぶことにとどまる。では、「哲学を実践する」とはどういうことなのか。こうした問いを立てることは、必然的に「哲学者とは誰なのか」という問題を伴う。哲学者はしばしば、特にマスメディア文化においては、新聞やテレビのトークショーなどで「知識人」とみなされ、ある種の真理を授ける存在として提示される。つまり、聞き手よりも高みに位置づけられ、聞き手はそうした人物から学ぶべき存在とされるのである。

このような問題意識から「トリエステ哲学学校」が構想された。この「学校」については、「学校」という名称を括弧に入れる必要がある。なぜなら、学校という概念そのものと、そこで行われている哲学という概念そのものも問い直すべき理由があるからである。その目的は、哲学をただ単に「学問主義（アカデミズム）」に閉じ込めるのではなく、むしろ哲学の「実践」としての可能性を回復させることにある。創設者とその運営集団（collettivo）は、哲学を「共に考えること」と捉えている。それは大学制度から切り離して「共に考えること」であり、むしろ制度そのもの——とりわけ大学制度——を問い直すものである。4人の対話の中でロヴァッティは、「別の思考のあり方が必要だ。なぜなら今流通しているものはもう機能していない」と強調した。大学で提供される「〇〇についての講義」は、この学校の目的からして全く機能的ではない。なぜならそれは「共に考えること」を引き出さないからである。

トリエステ哲学学校は、ある種の哲学的観念を推進すると同時に、それ自体も制度の一部であり、権力と絡み合っていることはいうまでもない。そのため、そうした権力を絶えず問い直していかなければならない。したがって、この集団にとってミシェル・フーコーが重要な参照対象一つであることは理解できる。もう一つの参照対象、フランコ・バザーリアらが主張する「精神の世界（psy）」（精神科学、精神分析、心理学）である。バザーリアはこの学校と特別なつながりをもつ人物である。講座はトリエステの旧精神病院——バザーリアがかつて働き、精神病院廃止の闘いを進めた場所——で行われているからである。つまり、バザーリアが「革命」を起こした旧精神病院の精神保健部門から生まれたこの場所は、トリエステを世界的に有名にした改革を想起させるだけでなく、学校の趣旨とも深く結びついている。後述するように、対話を精神医学的実践の根本手段としたバザーリアの姿勢は、トリエステ哲学学校の実践と多くの親和性をもっている。したがってこの場所を選んだこと自体、バザーリアに実践の思想が

あるゆえに、深い意味を持つ選択であった。しかし、なぜ哲学学校が精神医学や精神分析を参照するのか。後述するが、それは、主体性の意味をもっとよく考えるためである。これはロヴァッティにとって重要なテーマであり、彼によれば精神世界、とりわけ精神分析は哲学が到達できない地点を補うことができる。このように異なる学問と必然的に結びつくため、学際性はこの学校の本質的な特徴である。医師、精神科医、心理学者、精神分析家が哲学者とともに働き、ともに思索し、意見交換を重ねていく。しかしこの学校は専門家だけの場ではない。もしそうであれば、再び学問主義に陥ってしまうだろう。ここは年齢も学歴も問わず、誰にでも開かれている。哲学を学んだことがない人、哲学書を読んだことがない人でも歓迎される。

哲学的実践における制度批判、ケアとの関係性、政治的視座といったテーマに入る前に、大学とは完全に切り離された学校をトリエステで開くに至った背景と、学校の活動を説明しておきたい。

## 2. 哲学は病んでいるのか？

もし哲学をすることが、文献を読み分析するという学術的な行為に還元されるなら、哲学的実践、つまりその存在を特徴づけてきた「行う」という側面が空洞化されるなら、おそらくそれは健全な状態とは言えないだろう。前述したように、トリエステ哲学学校は、創設者ピエル・アルド・ロヴァッティの切実な要請から生まれた。その要請とは、専門的な哲学の領域の「先に進む」(*andare oltre*)、そして何よりも「哲学の専門家」そのものを先に進めて視野を広げることであった。彼自身も、哲学の地平を広げるため、若い時から精神分析や文学に接近したと認めている。哲学とは「我々が置かれている矛盾や逆説的な結び目を問い直すことを可能にする」<sup>1</sup>のものであり、それは今日、哲学が閉じ込められている制度そのものを巻き込んだ根源的な営みを意味する。だからこそ、彼は自らが居住するトリエステで、大学の外で活動を続けることが必要だと考えた。もっとも、ロヴァッティが繰り返し述べるように、この学校は彼一人のものではなく、集団的努力の成果でもある。創設者と同じ要請は、古くからのメンバーの中にも見いだされる。たとえばマリオ・コルッチは、バザーリアに関する近著のなかで「絶えざる知的な動員は、日々、実践と対峙するなかで試されなければならない」<sup>2</sup>と書いている。

現象学を専門として訓練を受けたロヴァッティは、創始者フッサールの枠組みにとどまるつもりはなかった。その重要性を認めつつも、彼はさらに踏み出し、実践に着手し、理論的に語られるだけで終わりがちな間主観性を現実において「実践」すべきだと考えた。しかしこの「先に進む」試みは、哲学者仲間や聴衆の間でも決して容易なものではなかった。繰り返し強調されるように、ロヴァッティが試みているのは、哲学からその「優越性の要素」<sup>3</sup>を剥ぎ取ることなのである。哲学的実践や、より一般的に「先に進む」哲学に対する根本的な誤解は、実は哲学者の姿勢そのものにあり、

<sup>1</sup> ロヴァッティ PA.『哲学は実践である』(La filosofia è un esercizio) La Nave di Teseo, Milano 2020年 133頁。

<sup>2</sup> コルッチ M.、ディ・ヴィットリオ P.『フランコ・バザーリア』Feltrinelli、ミラノ2024年、59頁。

<sup>3</sup> 『哲学は実践である』131頁。

そのために語る者と聞く者のあいだに権力関係が生じる。話し手と聞き手という枠組みを設定すること自体に問題があるのである。すなわち、そこには哲学者の仮想的な叡智と仮想的な優越的地位が立ち現れ、哲学者は聴衆に対して何らかの教訓を授ける者として振る舞うことになる。

ロヴァッティが「哲学語（フィロソフエーゼ）」<sup>4</sup>を解体する最初の試みは、彼が1976年から編集長を務めた季刊誌『aut aut』に始まる。この雑誌はイタリア国内にとどまらず国際的にも高い評価を得ている。創刊は1951年、ロヴァッティの師であるエンツォ・パーチによってなされ、哲学的議論を人文科学や芸術へと開くことを目的とした。読者層は多様で、哲学者だけではなく、広い意味で文化に関わる人々や社会科学・心理学に関心をもつ人々を対象とする。雑誌の紹介文は目指す読者層として、「自らの批判的形成のため、また日々の実践における市民的良心を築くための思考の道具を探している若者たち」<sup>5</sup>を挙げている。ここにも、哲学は市民的良心の形成に本質的に結びつくという発想が見てとれる。

ロヴァッティの試みは、第一に言語的なものである。本稿で詳しく述べる余裕はないが、ここで指摘しておきたいのは、その試みが哲学の言語を他の言語に開こうとするものであったという点である。文学の言語、そして特に精神分析の言語に向けてである。哲学の言語は、ある意味で「爆発させる」必要があった。しかしその爆発は、より大きな「表現の明晰さ」<sup>6</sup>をもたらしものでなければならない。だが明晰さの追求には畏も潜む。説明を単純化しすぎると、議論の重要な過程が失われてしまうし、何より書くという「行為」が失われる危険がある。ロヴァッティは次のように主張する。「文章を書く際には、労働を再現しようと努めなければならない。書くことは労働なのである。もちろん書くことは流れるようでもあるが、批評的で論考的な文章であるならば、その演劇的経験をすくいとろうとしなければならない」<sup>7</sup>。ここでいう「演劇的経験」について補足するなら、ロヴァッティは書くことが行為となりうることを示すために、「遊び」に関する自著<sup>8</sup>に立ち返り、遊びについて書くためには、実際に遊ぶ必要があると語る。つまり、書くことを通じて遊び、書くこととともに遊び、新たな言語を創造しなければならない。そして次のように続ける。

哲学が懐疑であるべきだと、ソクラテス以来の哲学者たちが常に言ってきたのなら、私はこう問いたい。懐疑をどう書けばよいのか？もし懐疑を断定的に書いてしまえば、懐疑は消えてしまう！だから懐疑は、完全に断定的ではない書き方で書かねばならない。それが〈おそらく〉ということだ。<sup>9</sup>

<sup>4</sup> 同上、65頁。

<sup>5</sup> <https://autaut.ilsaggiatore.com/storia/>

<sup>6</sup> 『哲学は実践である』66頁。

<sup>7</sup> 同上、67頁。

<sup>8</sup> ロヴァッティ P.A., ダル・ラーゴ A, 『遊びとして』(Per gioco) Raffaello Cortina, Milano 1993年。

<sup>9</sup> 『哲学は実践である』70頁。

ロヴァッティはさらに、この〈おそらく〉を「弱い思考」として定義する。「弱い思考」の発想は、1980年代初頭に彼ともう一人のイタリア人哲学者ジャンニ・ヴァッティモが提起したものである<sup>10</sup>。「弱い思考」とは〈おそらく〉の思考であり、自らを弱め、「真理を問い直す」<sup>11</sup>思考である。この姿勢の中にロヴァッティは再び現象学とのつながりを見出す。すなわち、思考を弱めるというのは「減速」の試みであり、現象学のエポケーにも近づくものである。この態度は、トリエステ哲学学校における倫理的・政治的挑戦のなかに息づいている。ロヴァッティによれば、現代社会においては1980年代以上に、この「減速」を実践することが求められている。

では、真理を問い直すとはどういうことか。それは絶対的なものに抗する闘いを意味する。したがって、絶対的なものには今なお「奇跡的な力」<sup>12</sup>が付与されているので、真理を弱めることは我々の文化の作り方に関わる営みであると理解できる。とはいえ、そうした絶対から完全に離れた位置に立つことは不可能である。「弱い思考」の実践は、絶対的なものを解体しようとしつつも、自らがその只中にあることを自覚する。ロヴァッティとヴァッティモが最初に定義したように、「弱い思考」とは、

あくまでも暫定的で、おそらくは自己矛盾した言い回しである。しかし、それはみずからがあるひとつの道を経過しているという合図であり、その経過の意味するところを示唆している。それは、支配的な理性との関係でいえば、あくまで、そこから分岐したひとつの道であるにすぎない。そして、どれほど翻訳しなおされカムフラージュされていようとも、そこから最終的に袂を分かつことはできない。<sup>13</sup>

この意味で、「弱い思考」は倫理であり、まさにこれがトリエステ哲学学校が目指すところである。哲学を教える（何らかの真理を教える）のではなく、「哲学を日常に落とし込み」、それを「生き方」とするのである<sup>14</sup>。

### 3. トリエステ哲学学校とは

ロヴァッティは大学での教職を2012–2013年度で終え、2014年にトリエステ哲学学校を創設した。この学校は、彼がトリエステ大学で行っていた現代哲学演習や、雑誌『aut aut』と密接に結びついている。学校は単に教え続けるための場ではなく、何よりも異なる場へと開放するものである。大学の教室から都市への移行であり、そこに、これまで述べてきた倫理的・政治的な行為が見てとれる。先に述べたように、重要なのは、この学校が集団的なプロジェクトとして構想されている点である。その目的には、「哲

<sup>10</sup> ジャンニ・ヴァッティモ、ピエル・アルド・ロヴァッティ編『弱い思考』、法政大学出版局、2012年。

<sup>11</sup> 『哲学は実践である』、75頁。

<sup>12</sup> 同上、77頁。

<sup>13</sup> 『弱い思考』、7頁。

<sup>14</sup> 『哲学は実践である』79頁。

学は勇気をもって自らをひとつの訓練、市民生活や社会、文化的成長のための有用な道具として提示すべきだ<sup>15</sup>というロヴァッティの主張が直接反映されている。

ロヴァッティの挑戦は、どのような背景をもつ人にも開かれた学校をつくることであった。すなわち、哲学を学んだ経験のある者に限定されず、年齢制限もない。異なる世代が並んで座り、対話できるようにする。初年度は16歳の若者と80歳の高齢者が並んで学び、研究者の隣には哲学愛好家の労働者が座っていた。このアプローチは使用される言語に革命をもたらす。筆者ら4人の対話の中で、コルッチはこれを「秘儀的でも通俗的でもない言語」だと表現した。つまり誰にでも届く内容を伝えるための言葉である。ロヴァッティは、この学校では大学と違って引用文献や著者名を多用しないと強調していた。もちろん、この方針はすべての人に歓迎されたわけではなく、それを理由に翌年以降参加しなかった人も少なくない。

また、学校の方針そのものも常に進化している。我々4人の出会いの場はブレインストーミングであると同時に実践的な場でもあり、学校はどのような側面がうまく機能し、どの部分を改善すべきかが常に議論されていた。個人的に受けた印象としては、メンバーが強い結束を保ちつつも常に変化し続けている集団であり、それは彼らが実践しようとしていることと完全に一致するものであった。その議論の中でロヴァッティは私に向かってこう言った。「学校は生きているものだと理解すべきだ。うちの誰かに『今年度はどうだった？学校はどんな感じ？』と尋ねると、返ってくる答えはどうだったかというより、『望む今後の学校像』というものになるのだ！」

### 学校における実践

先ほど触れたように、トリエステ哲学学校は、「学校」という名称からしてすでに批判的である。なぜなら、ここは授業が行われる学校ではない。集団のメンバーや招かれた専門家による「講義」ではなく、むしろ「問い」や「中断」<sup>16</sup>を手段とする「介入 (interventi)」<sup>17</sup>と呼ばれる形式が取られている。そのため、話はしばしば講師の予想を超えた方向へと展開する。

この言葉遣いにこだわるのは、それこそが創設者たちの探求の核心に関わるものだからである。それこそが創設者たちの探求の核心だからである。新しい言語の必要性は、自分の行動に名前を付ける言葉がない場合に生じる。それは、その行動がこれまで行われていなかったか、あるいはその行動がこれまでとは異なる方法で行われているためである。ロヴァッティは、2023年から2024年にかけてトリエステの日刊紙『Il Piccolo』に連載した記事をまとめ、『言葉の中で (Dentro le parole)』と題する著書を

<sup>15</sup> 同上、138頁。

<sup>16</sup> 外部講師がかなり「学術的」な講演（つまり学校の目標とは別段一致しない話）をした際、ロヴァッティが「あなたは何歳ですか？」と、講師を驚かせる衝撃的な質問をしたことがある。その時、講師は質問の意図を理解せず、予定通り講演を続けたという。

<sup>17</sup> 先に、言語の問題がロヴァッティにとって中心的な課題であると述べた。4人の対話時に、この点に関して私が「授業」(lezioni)という用語を使うと、正しい用語は「介入」(interventi)であるとの指摘を受けた。同様に、「学生」という用語も「コースに出る方」(corsista)と呼ぶべきだと指摘された。

出版した。『言葉の中で』というタイトルは、「我々の時代を特徴づけるキーワードである『真実』『自由』『文化』、そしてそれらに日々伴うその他のキーワードを用いて取り組む方法」<sup>18</sup>を示し、前述の「授業」という用語に関する事例にみられるように、学校内で行われている作業を文書化するものである。ロヴァッティはこう続ける。「我々はこれらの言葉に近づきつつ遠ざかるという二重の動きを試みなければならない。社会関係においても私的領域においても、この批判的操作が有用な結果をもたらすかどうかは読者自身の判断に委ねたい」<sup>19</sup>。この言葉への接近と距離化という二重運動は、本稿が描こうとしていることとも見事に重なる。

この動きは、ロヴァッティのもうひとつの重要な概念「距離を生きる (abitare la distanza)」にも通じている。これは日常の中で私たちが生きるパラドックスを表す表現である。「生きるとは使用することや立場を取ることに関わる」<sup>20</sup>が、我々が生きるべきは距離である。ロヴァッティはまず、距離を説明するために、それがどういったものではないかを記す。距離とは空虚でもなく、我々の所有物でもない。それは構築されるべきものであり、その中で動き、遊ぶことのできる場である。それは対象に対する主体の批判的距離ではない（これも否定形の定義）。むしろ、近接性をもたらす盲目性や抑制に抗する実践であり、距離が呼吸や沈黙を可能にする。したがって、言葉に意味を与えるためにも、このような実践をしなければならない。ロヴァッティがこの操作に認める有用性は興味深いものであり、それは社会的関係と私的領域の両方に影響を与えるだろう。『言葉の中で』は単なる個人的な考察のように見えるが、ここにも哲学が常にもつ政治的な意図が見てとれる。

学校の説明に戻りたい。学校の基本的な構造としては、三つの「作業場 (cantieri)」に分かれ、それぞれが異なるテーマを扱い、さらに三つの演習 (laboratori) と組み合わせられている。特に演習では参加者が自らの経験を持ち込み、個人的体験を通してテーマを検討し、相互にテーマを問い直す。ここにこそ哲学を実践として提示するという学校の核心的な試みが表れている。注目すべきは、演習のファシリテーター全員が哲学プラクティショナーの訓練を受けている点である。

4人で対話した際にも、「哲学的実践」(pratiche filosofiche)という表現の意味について活発な議論が自然発生的に生まれた。この議論はまるで実践だと個人的に思ったが、実践という概念自体も再考する必要があることが浮かび上がった。哲学プラクティショナーの一人であるアレッサンドロ・ディ・グラツィアは、演習、つまりある意味での哲学的実践においては、「人は自分の信念を試される」と説明する。興味深いことに、そのような対話の中から当たり前のように矛盾が現れるが、それは人々を遠ざけるのではなく、むしろ近づけ、共同性を生み出す。「実践の目的はある種の真理を伝えることではなく、出会いや社会性の体験の機会を促すこと」だと彼は強調する。その出会いには矛盾や対立が避けられず、それこそが、社会性を形成するために必要なのであ

<sup>18</sup> ロヴァッティ P.A. 『言葉の中で』 (Dentro le parole) Meltemi, Milano 2024年、9頁。

<sup>19</sup> 同上。

<sup>20</sup> ロヴァッティ P.A. 『距離を生きる』 (Abitare la distanza) Raffaello Cortina, Milano 2007年 loc 11(キンドル版)。

るが、現代社会には矛盾を消し去る傾向が見られるという。

ディ・グラツィアと同様にロヴァッティも、学校の目的は「集合的知性を形成すること」<sup>21</sup>だと捉えている。対話は不可欠であるが、学校は隔週に開かれ、この二週間という間隔が非常に重視されている。この沈黙の時間は、参加者が個別に議論を再構築することを可能にするが、制御の難しい時間でもある<sup>22</sup>。ロヴァッティ自身、この試みは往々にして期待したほど成功しなかったと認めている。例えば、「作業場」を行った土曜午後から日曜朝までの短い中断でさえ、テーマへの関心を薄れさせることがあるという。それでも学校は、物理的に離れていても共同体と呼べる空間をつくろうとしている。メールでのやり取り、学校ウェブサイトでの活動、資料の共有——これらすべてが哲学的訓練の一部であり、実践は決して止まることがない。ディ・グラツィアの言葉を借りれば、これは「文化をつくる」試みであり、その成果によって参加者だけでなく、学校で働く人々も豊かになる。

ロヴァッティはこの訓練を「批判的訓練」、「開放」(apertura)と呼ぶ。そしてこれは「哲学的専門性を絶対的かつ自律的なもの」<sup>23</sup>とみなす立場に抗う態度でもある。この訓練は哲学の脱学問主義をも含み、それを実践し、いわば不従順の哲学として位置づける。しかしいうまでもなく、実践への開放、すなわちアカデミアからの逸脱はリスクを伴い、批判や不信を招く。

#### 4. 哲学をケアすること、哲学でケアすること

本稿は、哲学は病んでいるのか、そして病んでいるとはどういう意味なのかという問いかけから出発した。そうであれば、哲学が医療やケアの領域で役立つとは考えにくいだろう。しかしロヴァッティらは、哲学が寄与しうる可能性を決して排除してはいない。ロヴァッティとトリエステ哲学学校にとって哲学を実践するとはどういうことかを提示してきたが、そうした実践であるなら、「哲学とともに、ケアの領域で働くこともできる」<sup>24</sup>。実際、ケアの領域で哲学は役割を担えるということが、2006年に出版された『哲学は癒すことができるのか？』(La Filosofia può curare?)<sup>25</sup>という著作のテーマであった。同書でロヴァッティは、哲学的実践 (consulenza filosofica) について自らの見解を述べ、それは何よりもプラクティスでなければならぬと書いている<sup>26</sup>。

<sup>21</sup> 『哲学は実践である』、143頁。

<sup>22</sup> Baldari 2020年を参照。

<sup>23</sup> 『哲学は実践である』79頁。

<sup>24</sup> 8月10日のインタビューでのロヴァッティの発言。

<sup>25</sup> ロヴァッティ P.A. 『哲学は癒すことができるのか？』(La Filosofia può curare?) Cortina, Milano 2006.

<sup>26</sup> これまで「哲学的対話」としてきた用語はpratiche filosoficheで、(複数形の) 哲学プラクティスを指す。『哲学は癒すことができるのか？』ではconsulenza filosoficaという用語が使われており、どのように訳すべきか悩んでいた。Consulenza filosoficaは主にGerd AchenbachのPhilosophische Praxisに近いもので、Counseling filosofico (哲学カウンセリング)とは意味が違ふ。後者は精神世界に関わり、Wellbeingを目標とする(つまりカウンセリング)。ロヴァッティの論考では、大体一対一で行われるconsulenza filosoficaはもっと広い意味をもち、グループ・プラクティスを含むpratiche filosoficheの意味に近いので、哲学的実践という表現を使うことにした。

ここでただちに問題となるのは、どのような哲学が哲学的実践になりうるのか、すなわちどのような哲学が自己や他者の「ケア」として提示されうるのかである。ケアは技術的な意味ではなく、「霊的訓練」（つまり生活に関わる実践）として理解されるべきであり、そこでは規範や真理が与えられることはない。むしろ、「もし真理があるのだとすれば、それは対話という訓練のなかで共に築かれるべきものである」<sup>27</sup>と述べられている。

哲学にケアの可能性があるのかに関するロヴァッティの議論は、この「臨床哲学ニューズレター」の主要テーマに関わるだけでなく、トリエステ哲学学校の実践についても多くのことを教えてくれるので興味深い。まず注意すべきは、すでに触れたように、哲学の位置に対する自覚である。「ケア」と言えば、必然的に「セラピー」という言葉が思い浮かぶ。そしてこの言葉は「我々の社会を特徴づける重要な要素」<sup>28</sup>でもある。哲学はこの治療パラダイムから離れなければならない。しかしそのためには、哲学自体もこのパラダイムに深く埋め込まれていることを自覚する必要がある。

前述した「思考を弱める」という方針に沿うなら、ケアに関わろうとする哲学は、人間は心理的に非常に脆弱であり、もはや自らを統制できないとする治療文化を拒否するだけでなく、その本質を暴き、解体しなければならない。したがって、「病」の観念と「戸惑い」や「不安」といった病の症状と見なされるものも、対抗する慰めの哲学という観念も批判されねばならない。ロヴァッティは、戸惑いや不安は実際には「経験への開口」であり、それ自体は癒されるべきものではなく、むしろケアのプロセスの出発点とみなすべきだと述べている。この戸惑いは「意味の欠如」を伴い、社会にうまく対応できない無力感を生み出すかもしれないが、それはむしろ、社会が医療化を通じて課す自己監視から距離を取る方法ともなりうる<sup>29</sup>。哲学はしたがって、ファルマコンとして現れる。それは「癒す」と同時に「毒」をもたらし、不安を和らげることを目的としない。ここでは明らかにフーコーが参照されている。フーコーについては後述するが、彼によれば、哲学には二つの側面——権力批判と自己・他者へのケア——がある。以下では、ロヴァッティ、コルッチ、ディ・グラツィアが学校の営みに「いつもある」と言う二人の思想家——ミシェル・フーコーとフランコ・バザーリア——着目したい。

##### 5. 「ケア」と「抵抗」——主体性をめぐるフーコー的問いかけ

ここまで「弱い思考」の倫理的・政治的側面について論じてきた。この議論は、トリエステ哲学学校が哲学を営む際に参照する思想家の一人、ミシェル・フーコーへとつながる。学校の目的には、権力を批判し、さらには権力を解体しようとする試みが含まれている。哲学は自らが持ちうる権力を意識するだけでなく、自らを構成する権力に取り囲まれていることを認め、立ち向かわなければならない。

<sup>27</sup> 同上、15頁。

<sup>28</sup> 同上、19頁。

<sup>29</sup> 同上、31頁。

『哲学は癒すことができるのか?』の中でロヴァッティは、主体を「病人」として定義する治療文化を例に挙げている。フーコーが『監視と罰』(1975年)で扱ったテーマが再び登場するのである。そこでは、主体を統御する主権的権力から、社会の装置、つまり制度的技術を基軸とする匿名の規律的権力への移行が論じられる。規律的権力のもとでは、自己監視が確立し、主体化は主体自身の行為によって生じる。人々は権力に適合するアイデンティティを構築し、自分を形づくるために必要な言説的要素<sup>30</sup>をすべてそこに見出す。たとえば治療文化においては、「不安」などの気持ちは確かに「病人」という主体の定義に当てはまる症状となり、その「不安」と向き合うために、自分にはある種のセラピーが必要だと認めることになる。

哲学的実践が担うべき役割は、この治療文化とそこにある装置への「抵抗」であるべきで、同時に「主体性の政治」<sup>31</sup>の提唱者でなければならない。それ自体が依然としてそうした権力装置の中に存在していることを自覚したうえでのことである。支配的文化の言説をそのまま受け入れる哲学的実践はありえない。哲学的実践は現代批判でなければならない。ただし、この批判は(ここで「弱い思考」が再び登場する)、新たな「真実の体制」であってはならず、強い思考であってはならず、弱める思考でなければならない。強い思考ではなく、むしろ思考を弱める思考である。そのパラドックス(そして哲学のパラドックス)は、真理の存在を否定できないが、真理を求める欲望と折り合いをつけねばならないという点にある。

さらにフーコーは、規律権力の分析だけでなく、「自己への配慮」に関する考察によっても重要な参照対象となる。とりわけ『主体の解釈学』と題する講義録(1981-1982年)は決定的である。フーコーを通して、我々は主要な論点、すなわち哲学とケアの関係性、哲学は癒すことができるのか、そしてそれは何を意味するのかという問題に立ち戻ることができる。ロヴァッティはまず、フーコーにとって「哲学は特別なケアであり、他者への配慮を含意する自己への配慮である」<sup>32</sup>と指摘している。ロヴァッティによれば、フーコーの講義から浮かび上がるのは「主体性の政治」であり、それは規律権力による自己監視の政治を突き崩すものである<sup>33</sup>。フーコーは『主体の解釈学』において、精神医学的権力に関する講義で規律権力に対する「抵抗行為」を取り上げ、つまり對抗策を提起している。自己への配慮は、こうした権力の中に組み込まれた実践である。フーコーは1984年に行われた「自由の実践としての自己への配慮」という重要なインタビューで、なぜ「真理への気遣いをおしてしか、自己を気遣わない」<sup>34</sup>のかと問いかけている。さらに、次のように述べている。

私の問題はどのようにして真理のゲームが権力の諸関係のなかに配置され、そ

<sup>30</sup> 同上、27頁。

<sup>31</sup> 同上、32頁。

<sup>32</sup> 同上、64頁。

<sup>33</sup> 同上。

<sup>34</sup> フーコー「自由の実践としての自己への配慮」、フーコー M.『思考集成1984-1988』第10巻、筑摩書房東京2002年、238頁。

れに結びつくことができるのかということです。たとえば狂気の医学化、すなわち狂っていると呼ばれる個人のまわりに医学的な知が組織されることは、さまざまな社会的プロセスの系列に結びついていました。それはあるときは経済的な次元のものであり、また諸制度や権力の諸実践に結びつくこともありました。<sup>35</sup>

したがって「主体」は、既に与えられた客体や真理として考えられるものではなく、権力関係のなかで形成されるものである。フーコーはさらにこう述べる。

私がしりぞけていたのは、——たとえば現象学や実存主義がしがちなように——主体の理論をあらかじめ前提してしまうことなのです。そして、この主体の理論から出発してたとえば、ある形式の認識がどのように可能なのかという問題を立ててしまうのです。私があきらかにしようとしたことは、主体はどのようにして、ある限定された形式において、狂った主体ないしは健全な主体、非行者としての主体ないしは非行者ではない主体として自分自身を構成するのか、ということなのです。そして主体は、真理のゲームや権力の実践などのいくつかの実践をとおして、そのような主体としてみずからを構成する。だから私は、ある種の主体のアプリオリな理論をしりぞけなければならなかった。それは、主体の構成つまりさまざまな形式の主体と、真理のゲームや権力の実践などのあいだにありうる諸関係を分析できるようにするためなのです。[...]主体は実体ではありません。それはひとつの形式であり、とりわけこの形式はつねに自己にたいして同一になることはないのです。<sup>36</sup>

つまりフーコーは主体のアイデンティティを前提とせず、実体的な主体から距離を取るべきだと論じる。これこそが、ロヴァッティの言う「抵抗行為」である。フーコーは「主体」というより「主体化（伊：soggettivazione）」という言葉を用いている。

この主体化<sup>37</sup>は、権力関係や真理と呼ばれるものとの関係を抜きにしては考えられない。それは実体的主体でもなく、社会・政治集団でもない。むしろ実践の次元への視線の移動であり、脱主体化へと向かう実践である。それは「主体を空にし、自己から解放する。つまり現代の個人性の檻という捕らわれから解放すべき主体、[...]現在の社会の生命政治的装置によって我々が同一視される新たな主体—個人に対する闘い」であるとロヴァッティは述べている<sup>38</sup>。

自己への配慮は、主体の（確定的な）認識（*connaissance*）ではなく、一つの実践である。フーコーは『主体の解釈学』において、ギリシア・ローマ世界と近代世界を

<sup>35</sup> 同上、240頁。

<sup>36</sup> 同上、231-232頁。

<sup>37</sup> イタリア語はフランス語と同様に、名詞が数を区別する。この場合、ロヴァッティは「主体化」の単数形（*soggettivazione*）ではなく複数形（*soggettivazioni*）を使うべきだという。

<sup>38</sup> ロヴァッティ P.A.、『ミシェル・フーコー』、Feltrinelli、ミラノ、2023年、58頁。引用文「存在しない主体」で言及されているテキストは、2008年に最初に出版された。

対比する。古代において自己への配慮は、市民の政治的自由に基づいていた。自由市民のみが自己をケアすることができ、そのケアは自己認識と正しい行為の仕方の認識に根差し、根本的に倫理的な実践であった。そして、たとえば家長は家族や奴隷を治めなければならなかったため、この自己への配慮は他者への配慮とも結びついていた。したがって自己への配慮はそれ自体倫理的であり、他者への関係を含む以上、他者への配慮でもあった。それは自由とその実践に直接結びついていたのであり、自由は主体の存在の変容に関わる。これに対し、近代における主体は、たとえばデカルトに見られるように、すでに真理の言説のなかに置かれ、倫理的契機は後から付加されるにすぎない。自由の行使としての変容はなく、もし変容があるとすれば、それはあらかじめ存在する真理に基づく。ロヴァッティはこう書く。「フーコーは我々自身を、健全で正常な存在として、自由の余地が、むしろ主体からの離脱である変容を計画し、いや、実行することにあるという状況において考えるよう促している」<sup>39</sup>。

このように自己への配慮を再考することによって、ロヴァッティは「自己へのケアのより批判的な検討を通じて、しばしば自明視される主体性の経験そのものを問い直す」<sup>40</sup>必要があると強調する。フーコーは、主体=実体、主体=主人というデカルト的前提——すなわち自分自身とその真理の主人としての主体であり、したがって知識を霊的訓練（生活の実践として理解される）より優先する主体——を批判する。前述したインタビューでフーコーが語る「自由の実践としての自己への配慮」は、「現代的な個人概念における主体の誕生と、それを特徴づける主体化の実践そのものに横たわる批判的実践」<sup>41</sup>であるとロヴァッティは述べている。主体化は「複数的で多様」であり、「実践の中で、真理のゲームの中で積極的に生み出される」<sup>42</sup>のである。

ロヴァッティはこうしてフーコーとともにデカルト的主体を批判し、「かつて insanus と呼ばれていた者を、いまや demens として主体から排除する。彼には主体として認められる権利がまったくない」<sup>43</sup>と述べる。この言説は、トリエステ哲学学校が参照する第二の人物フランコ・バザーリアへと必然的につながる。バザーリアは、精神病院に入院させられた人たちに「主体性を回復する」べく生涯をかけて戦った。

## 6. 現象学を超える試み——バザーリアにおいて開かれるもの

上記の引用にとどまらず、ケアとセルフケアに関するこれまでの議論全体にわたって、バザーリアは、ロヴァッティをはじめ学校集団全体に影響を与えてきた。ここで注意すべきは、バザーリアの影響は精神医学そのものへの同意を意味するものではないということである。バザーリアは、ロヴァッティらが精神分析学の分野で参照するもう一人の重要な人物ジャック・ラカンと同様に、自らの学問分野における真実の体

<sup>39</sup> 同上、64頁。

<sup>40</sup> 『哲学は癒すことができるのか?』84頁。

<sup>41</sup> Rovatti P.A., Michel Foucault, 66頁。

<sup>42</sup> 同上、67-68頁。

<sup>43</sup> 同上、63頁。

制に対して批判的に応答した。バザーリアは生涯を通じて、当時の医学に批判的な精神医学を実践し続けたために、しばしば「反精神医学」の代表ともみなされた。この点については、コルッチがバザーリアに関する近著で強調していることが興味深い。

精神医学の深い知識を持つバザーリアが認識行為の停止を求めるとき、それは知りたいという衝動を抑圧することや、至福の無知に身を委ねることを意味しない。むしろ批判的文化を構築したいという抑えがたい欲求に空間を与えることを意味する。それは決して知の拒絶ではなく、その「支配的」姿勢、その制度化、それをイデオロギー、すなわち絶対的真理として機能させるすべてのものを拒否しているのである。<sup>44</sup>

ロヴァッティの著作『主体性を回復する』（2008～2009年に行われたバザーリア思想に関する講義を収録）の序文を読めば、ロヴァッティの哲学的思考とバザーリアの思考の近さは明白である。「バザーリアが絶えず戦ったのはラベル化に対してであり、制約的な定義で進むあらゆる知＝権力に対してであった。それはまた哲学的ラベル化という悪弊に対してでもあった」<sup>45</sup>。ロヴァッティとコルッチが「現象学的」と定義する思考方法は、諸学問分野に伴う権威を絶えず問い直すものである。精神医学の権力と言説への批判、狂気とは何かという問い、主体の概念への関心——これらすべては、方法論的にも理論的にも、ロヴァッティの哲学的歩みにおいて、それゆえ彼が創立した哲学学校においても避けられない問題である。

『主体性を回復する』に収録されたコルッチの発言に次のようなものがある。「バザーリアを読んで気づいたのだが、彼における現象学は依然息づいており、彼は現象学を独自に解釈しているだけでなく、その政治的ジェスチャーも現象学を徹底的に押し進めたものと解釈できる」<sup>46</sup>。この指摘から、バザーリアにおいては実践が思考様式や理論的関心と分かちがたく結びついていることがわかる。コルッチは現象学の「先に進む」と述べ、それは先に指摘したように実践すること、考えたことを行うことを意味する。そして、この実践が政治的行為となることも明らかである。なぜなら、バザーリアの思想は精神病院の廃止につながり、入院していた者に権利と社会生活を取り戻すことになったからである。

学問をイデオロギー化し、それら（精神学、精神分析、哲学）を「制度」とみなすことにバザーリアは抗し、「自分が働く場の現実的条件に注意を払う必要性」<sup>47</sup>を強調したとコルッチは指摘する。先にラカンに言及したが、コルッチはここでラカンを引き合いに出し、ラカンも精神分析家に対し、自らの知が問題を孕むことを警告し、精神分析という「制度」を問い直したと述べている。バザーリアもラカンと同様に、精

<sup>44</sup> コルッチ M.、ディ・ヴィットリオ P.『フランコ・バザーリア』Feltrinelli, Milano 2024年、61頁。

<sup>45</sup> ロヴァッティ P.A.『主体性を回復する』Edizioni Alpha Beta, Merano 2013年、8頁。

<sup>46</sup> 同上、62頁。

<sup>47</sup> 同上、67頁。

神医学的知を問い直し、ロヴァッティの言葉を借りればそれを「弱め」、そして実践において知を「生き延びさせる」道を見出したのである。バザーリアの行為は現象学的であるため、精神医学的知を括弧に入れる、すなわち伝統的学問の真理を停止するエポケーの実践であった。同時に、バザーリアは精神病院とそれを正当化する思考を解体し、隔離は病を治すどころか慢性化させると主張したので、それは倫理的・政治的行為でもあったと言えるだろう。

最後に、バザーリアの実践とトリエステ哲学学校の試みを結びつけるものとして、共同体と対話を中心に据えていることを挙げたい。ただし、それはバザーリアや学校の創設者たちが不可欠と考えるエポケーの訓練と密接に結びついた特定の対話である。コルッチは、患者との面談におけるエポケーの理解について非常に興味深いことを述べている。すなわち、相手の苦悩に解決策が見出だせないとき、コルッチはペースを落とし、沈黙に身を置くのだという。そして「他者の経験は自分のものではないと認めなければならない。他者は自己と同一ではなく、異なるものとして認めなければならない」<sup>48</sup>と述べる。この訓練とは、無意味さを探究し、未知のものに踏み込み、それをまず括弧に入れることである。ここで括弧に入れられるのは他者と他者性の経験であるが、同時にそれは我々自身にも深く関わる。それは、コルッチがロヴァッティを引用しながら、自我を粉碎し、抑え込み、その「権力欲」を制御する作業なのであると述べる。ケアとの関係においては、沈黙、後退、相手の言葉を流れのままに受け止める態度が不可欠である。まさにこの異質さ、不理解において他者の論理に驚かされることこそ、ケアを担うすべての者が持つべき倫理的・政治的姿勢である。

バザーリアも入院している者と医療スタッフの対話の場として集会(assemblea)を組織する際、伝統的な知を括弧に入れ、実践と対話ができる場を開いた。コルッチはバザーリアの最も哲学的な文章とされる「身体、まなざし、そして沈黙」から引用する。そこには他者との出会いについて次のように記されている。「他者と出会うことは、自分自身を構成する物質性の単純認識を行うのではなく、[...]私自身の反映として実現する。向こうの他者の存在にこちらの私の存在との共存経験を私は認識」<sup>49</sup>。他者性と近接性を共存させるには、沈黙が決定的に重要になるとコルッチは言う。その沈黙は、

他者の侵入から身を守るための空間であると同時に、他者を受け入れる、あるいは他者に受け入れられるための空間でもある。呼吸のように変化する近接性、[...] 自分自身の世界における位置を確認するため、[...] 我々を構成する他者性を認識し、そして再び距離を置くため、つまり、他者に疎外されることなく自分自身を見つけることができる距離を置くためである。<sup>50</sup>

<sup>48</sup> 『フランコ・バザーリア』 65頁。

<sup>49</sup> フランコ・バザーリア「身体、まなざし、そして沈黙」、フランコ・オンガロ・バザーリア編、梶原徹訳『現実のユートピア フランコ・バザーリア著作集』みすず書房、2019年、31頁

<sup>50</sup> 『フランコ・バザーリア』 67-68頁。ロヴァッティも沈黙を非常に重視している。『哲学は実践である』の中で、彼は躊躇と沈黙が批判的思考に必要な行為であると書いている、129頁。

だが、言葉の停止とともにバザーリアは交渉を教えたことをコルッチは想起させる。これは学校の実践においても重要な点だろう。コルッチは次のように書いている。

交渉とは要求し、主張し、要求する相手の理由に耳を傾けることだが、時に相手は、邪魔をしたり、侮辱したり、攻撃したりすることもある。我々に同意せず、反抗的で、反抗的な相手、バザーリアにとって我々の最初の重要な対話者であり、制度的な規律に抵抗し、自分を単なる病人として扱おうとする制度の中で、個人としての自分の声を主張する相手である<sup>51</sup>

集会や討論においては、この批判的で時に対立的な力が奨励された。対立は抑え込まれるものではなく、対話が成功した証であった。

前述したように、トリエステ哲学学校には何かを教えるための講義はない。そこで行われるのは、質問や中断、時に批判を伴った「発言」である。学校で行われているグループ実践を分析するなかで、アレッサンドロ・ディ・グラツィアは、もっとも豊かな側面は、誰かが発言した後、グループの反応が予測不可能であることだと述べている。こうした瞬間は対立や攻撃性を帯びることも多いという。しかしまさにそれこそが、何かを動かすために不可欠な契機である。ただし、それらをモニターし、ペースを落とし、見過ごされがちなものを読み直すことが必要である。つまり、予想しないものに余地を残す必要がある。それは「時に機能不全の主体として現れ、想定される理性の秩序を破壊し、崩壊させ、論争や拒絶の対象となる」<sup>52</sup>。ディ・グラツィアはこう続ける。「その主体はタナトフォロスの主体、すなわち死をもたらす者として同定され、自らの苦悩によって他者全体を感染させかねない現実的なリスクを孕む主体である」<sup>53</sup>。しかし、まさにそのリスクのおかげで、他の参加者たちも語られたことを問い直し、それによって自らを問い直す。すなわち、エポケーの訓練を実践するのである。

ここではこの問題を詳しく取り上げないが、ロヴァッティにとって精神分析との対話は哲学プラクティショナーの養成において不可欠な要素である。精神分析学と精神医学は、哲学と「精神 (psy)」関連分野を学際的に融合させた学校教育に欠かせない要素であることを忘れてはならない。なぜなら、ロヴァッティによれば、哲学は主体に関して「決して核心に迫らない」<sup>54</sup> ため、主体性とは何かを理解するには精神分析学の寄与が不可欠だからである。ここから、学校教育における学際性の必要性が生じる。もちろん、その場合も、精神分析の力を暴くことが哲学の任務であるべきである。事実、この学校の初年度のトピックは「迷える主体たち」であり、このテーマに対する創設者の関心の強さを示すものであった。この関心は学校全体で共有されていたとコルッチは強調している。

<sup>51</sup> 同上、70頁。

<sup>52</sup> ディ・グラツィア A.「中立を設ける」、未刊。

<sup>53</sup> 同上。

<sup>54</sup> 8月に行ったインタビューから引用。

## 7. 終わりに ― 哲学の政治的ジェスチャー

ここまでフーコーとバザーリアについて考察してきたが、明らかになったのは、権力や言説を解体し、それらを弱めることこそが哲学の政治的ジェスチャーであり、それが倫理的な歩みを刻むのだということである。哲学的実践も、より広く哲学そのものも、「言説の効果を生み出すべき」<sup>55</sup>であり、そして冒頭で触れた脱学問主義の観点からすれば、それは制度の外でなされるべきである。これがまさに、トリエステ哲学学校が存在する理由である。

4人の対話の中で、政治と学校のつながりが重要な形で浮かび上がった。前述したように、社会性を経験できる場の形成が議論された。このような場を可能にするために学校の「参加者」（受講生）が定期的に提案しているのは哲学学校と都市の政治、つまり哲学と政治を繋ぐことだとロヴァッティは言う。残念ながら、この関係性は制度の側からは生まれず、「社会に対する学校の政治的インパクト」はまだ現れていない。

結論に入る前に、先に少しだけ触れた、哲学を実践や倫理として考える上で重要なテーマについて、ここで考えてみたい。それは、「自己と他者へのケア」である。「タナトフォロスの主体」という概念を紹介したが、ディ・グラツィアはそれを説明する際にこう付け加える。「タナトフォリックな瞬間とは、[...] 誰もが自分自身について持っているイメージの耐久力が試される瞬間であり、それは、主体が無意識に信じているにもかかわらず、他者が持つイメージと流動的で相互的な混交状態にある」<sup>56</sup>と指摘する。タナトフォロスは、自己へのケアをめぐる議論に常に潜む状況、すなわち我々は常に他者を前にしていると同時に、我々自身も他者にとっての「他者」なのである。後期のフーコーを取り上げた際に、ロヴァッティは主体に関して次の側面に言及した。すなわち、我々が自己を知り、自己であるためには、必然的に他者でなければならない。それゆえ、我々が自分自身に対して試みる統制や自己監視は、実際には幻想にすぎない。他者は常に我々の主体性の一部であり、また、タナトフォリックな瞬間について述べたように、予期しないものは我々自身の中にある他者を露わにする。つまり、ケアが成立するためには、アイデンティティと他者性が重なり合い、互いに滑り込む必要がある。ロヴァッティは次のように述べている。

我々の主体性に属し、それを特徴づける他者が存在する。それを認めることも、議論することもできる。この自分の中の、自己に対する異質性を否認することこそが、我々を旧来・新来の主体化の形態にさらし、知＝権力の蜘蛛の巣にとって都合のよい柔軟な主体へと仕立て上げてしまうのである。

自己と他者へのケアとは、この意味において、主体のあらゆる自己変容に属する他者性を引き受けることである。私たちは常に何か別のものへと変化していくが、その逃走こそが主体化の条件なのである。もし我々が自らの実践の主人であると感じるとしたら、その瞬間にはもはや自分自身の主人ではない。もしその訓

<sup>55</sup> 『哲学は癒すことができるのか?』34頁。

<sup>56</sup> ディ・グラツィア A. 「中立を設ける」

練が効果を発揮し、いわゆるケアが有効であるならば、それは我々が他者に少しの余地を与え、いわば自分自身に時間をかけることに成功したことを意味する。<sup>57</sup>

真理を問い直し、それを弱めることは、実は主体化そのものから始まる。真理と他者性は切り離せないと、ロヴァッティはフーコーの『真理の勇気』を引いて言う。なぜなら真理は唯一でも絶対でもなく、常に弱められるべきものであるからである。だからこそ真理は常に他なるものである。同様に主体も常に他者でもある。ここでロヴァッティは、哲学的実践はむしろ「哲学的経験」であるべきだと強調し、その経験が「哲学的」であるためには、この逆説的な主体性を「伝える」ことに成功しなければならないという。ここでいう「伝える」は重要な意味を持つ。すなわち「各人が自分自身で実践を行えるようにする」<sup>58</sup>ということである。この実践は常に行われるべきであり、哲学が明示的な対話やコミュニケーションの方法となっているときに限らない。要するに、哲学は生き方に関わる必要がある。

そのためには、前述したように、時間を与えること、または距離を置くことが必要であり、それは政治的なジェスチャーでもある。対話が急速化する現代に抗う政治的なジェスチャーである。哲学を実践することは、努力であると同時に責任を伴う。ロヴァッティはコロナ禍の折に著わしたエッセイ集の中で、ロックダウンによって強制された減速が、エポケーを実践する契機となることを願い、こう述べている。

私が願っている責任感とは、視点の転換のようなものである。そこでの眼差しはまさに自分自身のものであり、たとえ近視であっても、他人の目を借りるのではなく、自分のものとして機能する。よりよく見えると思われる他人の目を借りることは拒否すべきである。外部から自分を見ているかのような優越的な眼差し、常に自分自身の監督者であるかのような視線は必要ない。<sup>59</sup>

この引用は、トリエステ哲学学校が哲学を政治的行為としてどう捉えているかを象徴的に示している。哲学は現実や、それを実践する者が生きる世界から切り離すことはできない。哲学を行うとは、この主体そのものと世界を包み込む他者性の実践である。それは常に他者との近接であるが、必然的に距離でもあり、問い直しであり、弱めることなのである。ロヴァッティが好んで用いる表現を借りれば、この距離を生きること実践を行うことこそ、トリエステ哲学学校が自らに、そして我々に課している挑戦なのである。

(Flavia Baldari)

<sup>57</sup> 『哲学は癒すことができるのか?』 82-83頁。

<sup>58</sup> 同上、83頁。

<sup>59</sup> ロヴァッティ PA., 『In virus veritas』 Il Saggiatore, Milano 2020年、loc 101 (キンドル版)。